

報告書



すべての子ども・子育て家庭が
安心して生活できる地域をめざして

～児童福祉施設等の専門性を活かした妊娠期からの切れ目のない支援～

- さらに、令和4年改正児童福祉法において、市区町村は、妊産婦・子育て世帯・子ども等が気軽に相談できる子育て世帯の身近な相談機関の体制整備に努めることとされており、保育所・認定こども園が主な担い手の一つとして想定されている。保育所・認定こども園には、かねてより地域の子育て支援の拠点としての役割の発揮が期待されていたが、改めてこれらの施設が能動的に地域へ関わることの重要性が示されたところである。
- なお、施設によっては、人員体制等により思うように地域に出向くことが困難な状況もある。そのような場合には、アウトリーチの取り組みを行う他の施設・団体等が活動の主体となりながらも、自らの施設が有する専門性の提供により間接的に支援に協力する等の連携が考えられる。また、前述のような身近な相談窓口や施設設備の地域への開放等、地域に開かれた施設の取り組みを進め、子育て家庭等にとって「何かあれば頼れる存在」となることも大切な視点である。

コラム

NPO法人と連携したホームスタートの取り組み

(愛知県豊橋市/幼保連携型認定こども園 明照保育園 中島 章裕)

- 英国で始まった「ホームスタート」は、研修を受けた地域の住民ボランティアによる訪問型子育て支援で、日本でも広がりを見せています。
- そのホームスタートのトラスティ（運営委員）になって10年以上になり、ホームビジター（訪問員）の研修をしたり、保育園へのつなぎ役として活動しています。
- 本園では、昔から子育て支援を重視してきました。保護者の心の安定こそが子どもの心の安定につながると考えていたからです。一方、園庭開放や子育て広場に来てくださるたくさんの親子を見ていると、「ここに来られない親子もいるのでは？」という思いも持っていました。そのような親子に園で支援できることはないのかと模索しているときに「ホームスタート」の活動を知る機会があり、共に活動をさせてもらうことになりました。
- 家庭訪問による子育て支援は、地域住民同士のつながりが薄くなり、親が孤立して子育てせざるを得ない状況等に心の支えになります。子育ての悩みを聞いてくれ、寄り添ってくれる人がいるだけで忘れていた笑顔を取り戻す親がいます。「頑張りすぎなくても大丈夫ですよ！」というホームビジターの一言で、子育てに前向きになれる親がいます。特にこの二年半にも及ぶコロナ禍では、孤立してしまった親子が多数おり、虐待件数も増えています。
- 子育て広場等に出かけづらい親子や専門機関に支援を受けるほどではないけれど、ストレスを感じている親たちに、この活動は笑顔を取り戻す機会を与えていると思います。

(3) 子ども自身のニーズのキャッチ

- 子ども自身のニーズについては、子どもの年齢や環境等により、子どもが自ら発信することが困難であることも想定される。特に保護者からの虐待など、子どもが抑圧されている状況の場合、子ども自身のニーズに周囲が気づくことが肝要であり、子どもにとって頼れる存在・大人（地域住民、支援者（専門職）等）を地域に育成することが求められる。
- また、このことを踏まえると、児童福祉施設等の支援者（専門職）は、地域のキーパーソンとなるような児童委員、住民等、子ども自身のニーズを把握し得る存在と日頃から関係性を構築しておくことで細かな情報を得られたり、その住民自身が支援の担い手として協力を得ることも期待できる。
- また、大人は気づいていないが、子ども同士がニーズを把握している場合もある。そのため、子ども食堂や放課後児童クラブ等の機会に子ども同士のネットワークとつながることも有効である。

2-2

児童福祉施設が今後、充実・強化すべき地域住民（子ども・子育て家庭）の福祉ニーズと対応

(1) 児童福祉施設による地域に潜在している福祉ニーズへの対応

- 図2で示した地域に潜在している福祉ニーズや制度の狭間のニーズは、支援の必要性や必要な支援内容については差がある。しかし、いずれのニーズもすでに支援が必要な状態であったり、周囲の関わりが薄い状態が続くことにより支援の必要性が高まる懸念がある。
- そのため、できるだけ早期の関わりが必要であることは明らかである。本委員会では、児童福祉施設等による妊娠期からの切れ目のない支援による子ども虐待予防について検討を進めてきたことから、ここでは、①「特定妊婦・若年妊婦」、②「栄養バランスの取れた食事ができなかつたり、教育の機会が得られない子ども」、③「ヤングケアラー」、④「不登校・引きこもりの状態にある子ども」の4つの課題状況を取り上げ、具体的な支援の方法等について整理する。
- なお、地域に潜在している福祉ニーズ等は地域性によるばらつきが存在する。さらに、各施設が発揮可能な専門性についても同一の施設種別であっても違いがある。そのため、対応しうる福祉ニーズや充実・強化すべき支援の方法は必ずしも

**事例を振り返って
(今後に向けた
ポイント)**

- 本ケースでは、母子が家庭内に引きこもってしまい、地域から孤立するリスクも想定される。それゆえ今後は、本児を子ども食堂等へ誘い出し、地域とつながり続けるための支援を行っていくことが必要である。また、ヤングケアラー同士が集い、不安や悩みを語り合う場に本児が参加できるようにも促していきたい。
- さらに、医療機関のMSW（メディカルソーシャルワーカー）や市役所及び市社協の障害者福祉施策や重層的支援事業の担当者らとケース会議を行い、本児のみならず、母親への支援の拡充も具体的に検討していきたい。
- このような事例は、児童養護施設退所児童へのアフターケアを丁寧を実施していれば、よく出会うケースであることが想定される。その意味で、児童養護施設関係者にとって、ヤングケアラー問題は、決して新規の問題ではなく、昔から眼前に広がっていた問題と言えるのではなかろうか。

④ 「不登校・引きこもりの状態にある子ども」への支援

- 不登校・引きこもりの状態にある子どもは社会との接点とともに支援者（専門職）との関わりも薄くなっている場合があり、状況が見えづらくなっていることが懸念される。また、その状態にある子どもをきょうだいがケアするケースもあり、ヤングケアラーのニーズも隠れている場合がある。
- 不登校・引きこもりの状態にある子どもは、自己肯定感や自己有用感が低下していることが想定される。これらを高めるような支援としては、児童福祉施設等の資源の活用による居場所の提供が一例として挙げられる。

事例 >>> 小中学校との交流を通じた不登校生への支援 (愛知県豊橋市／幼保連携型認定こども園 明照保育園)	
当事者の課題	○ 様々な課題等を背景に持ち、不登校気味な状況である。
関わった専門職等	○ 保育士 ○ 臨床心理士 ○ 小中学校の教員
ニーズを把握した経緯	○ 不登校生支援の一環として児童クラブ内にフリースクール部門を始めたことによる。
支援内容	○ 保育園として平成15年に児童クラブを開設したのと同時に、不登校生支援の一環として児童クラブ内にフリースクール部門を始めた。以前より、卒園児の中で小学校や中学校で不登校気味になっている生徒がおり、「その子どもたちのために何かできることはないのか」と模索していたためである。

支援内容

- フリースクールと言っても利用料や補助金はない。活動内容は、不登校の子どもが引きこもらないように、園で遊ぶ機会や行事に参加できる機会を作ったり、保護者と学校の話し合いの懸け橋になったりという程度である。しかし、やり始めて分かったことは、不登校生と園児たちの相性の良さであった。
- 当初は、卒園児中心であったが、直近5年ほどは、市の教育支援センターや中学校で教室に入れない子ども（別室登校生）とも、定期的に園児と遊んだり、世話をしたりする機会を作ることができた。中には、家庭環境が複雑な子ども、不登校の子ども、発達障害を抱えている子どももいたが、この子どもたちに必要なのは、社会の役に立っているという自覚だと考えている。
- 同年代の子どもたちといると臆してしまう生徒も、園児たちにとっては、何でも出来るスーパーお兄ちゃんやお姉ちゃんである。おどおどしていたり緊張している生徒たちに「君は、そのままでも大丈夫だよ」「一人じゃないんだよ、君には、良いところが沢山あるんだよ」と気付いて欲しいのである。慣れてくると、きらきらとした真面目さで、汗をかきながら園児たちの誘いに一生懸命応じている姿がある。毎回帰る時の何ともいえない笑顔はとてもかわいいものでもあった。園児たちと関わることで自己肯定感が向上し、登校が出来るようになった子どももいる。中には、その後保育士を目指して本園の職員になった子どももいる。「学校には行きたくないけど、児童クラブには行きたい」と言っていた子どもは、高校の夏休みに児童クラブのアルバイトに来ている。交流が行われる日には、園に一週間に一度来ている臨床心理士にも可能な限り同席してもらい、専門的なアドバイスをもらっている。
- 不登校生と園児たちの交流に手ごたえを感じているため、本園のような取り組みが他の保育施設や幼稚園にも広がることを願っている。
- 軌道に乗ってきたと思っていた不登校生支援も、コロナ禍で二年以上もの間中止になっていた。少しずつ信頼関係を築いてきた学校の教員も転勤することとなった。再出発の中、上手くいかないことも多いが、新たな出会いの中で取り組みを強化できている部分もあり、今までは年に数回だった教育支援センターの生徒たちとの交流が、月に一回の交流になった。
- 一方、完全に引きこもってしまっている子どもたちとの交流が出来ていない。短時間（給食を一緒に食べるだけ）でもよいので、この子どもたちとの交流が出来る方法を考えている。このコロナ禍で進んだオンラインの会議システム等も使えないかと模索しているところである。

**事例を振り返って
(今後に向けた
ポイント)**